

語用論的接続詞

武内道子

I

接続詞は談話におけるつなぎ (cohesion)¹⁾ の一つであり、文と文を連結する役目を有する。接続詞はそれ自身意味を有するが、その意味は、先行する文 (S_1) と後続する文 (S_2) の連続の中で明らかにされるのである。従って、接続詞を単に意味的観点から見ていくことは、文の意味を十分に把握することにならないと考えられる。

二つの文の有機的集合体の中で接続詞をとらえる、という語用論的側面が問題となる。語用論的というのは、一人の話者による二つの発話行為、あるいは話者交代のある会話における発話行為の連続を考慮に入れる、ということである。一般的に語用論的任務は、発話された文の統語形式と、その意味論的意味と、その文を用いる時の話者の意図した発語内行為 (断定・要請・警告・約束といった) の間の関係を調べることである。文と文の連続が意味的一貫性を満足させるべく編まれるごとく、発話行為の連続にも必然的つながりというものがある。この場合語用論的一貫性 (Van Dijk, 35) とは何かということが問題となる。発話された文と文の連続が、発話行為の連続とどういう関係を保っているのか、具体的には、つなぎ語によってどう表現されるのか、ということが本論文の主旨である。

はじめに、文を命題内容と、文を発することによって遂行される場所の特定の発語内行為とのかかわりにおいて切りこみ、ここでの論旨が、発話を二段構造でとらえていることを明確にしておきたい。言語を話すということは、断定・質問・命令・勧告・約束などの発語内行為を遂行することにはほかならないわけである。Searle (1969) は、発語内的行為において内容を表わしている部分を命題内容 (P) と呼び、発語内の力を示す指標 (F) とのかけ合わせ、F(P) として発語内的行為 (illocutionary act) を形式化している²⁾。

Searle の例を借りると、

1. Sam smokes habitually.
2. Does Sam smoke habitually?
3. Sam, smoke habitually.
4. If Sam smokes habitually, he will not live long.

(1)~(4)各文の発話は、「断定」「質問」「命令」(もしくは「要請」「仮定」というぐあいにそれぞれ異なった発話内の力を有している点で、Fは異なる。しかしこれらの発話には *that sam smokes habitually* で表わされるような共通の意味内容Pがある。文というのは発することによって話者から相手に向かって主張するものと考え、たとえば(5)の発話は(6)のように分析されるという立場をとる (cf. Ross 1970)⁹⁾

5. John is ill.
6. I tell you [John is ill]

さて、*may I help you?* と言えば、この発話内行為は「申し出」であるが、統語形式は疑問文である。このように文を発するという発話行為と文を用いて遂行される発話内行為との間にはズレがあり、このズレを正すための説明こそ、語用論の担うべき役割と言うべきであろう。また、意味論における意味は、命題の真偽を問題にするが、一方、発話行為においては、その文の発話が適切かどうかの問題となる。発話したことの適否 (*appropriateness*) を論じることが語用論の意味の問題といえるのである。

この小論では等位接続詞の *and, but, or* と⁴⁾ 従属接続詞として *because* (及び *since, if in case*) を取りあげて、これらの接続詞の語用論の意味を考察し、意味論的側面との違いを明確にしようとする。そして、発話による特定の機能を果たすため、話者は、文タイプの構造とは違う規則や規約を内在し、駆使していることを垣間見ようとするものである。

II

1. AND

And は最も一般的な接続詞であり、話しことばにおいて特に多用される。文法上等位に結びつける機能のみを有し、それ自身明確な意味をもつ

ていない。すなわち, *and* の意味はその文脈において決定されると言える。意味論的用法としては, i) 先行する文 S_1 と後続する文 S_2 が時間的に同時進行中であるか, S_1 が起り, 続いてそのあとに S_2 が起るかを示す。ii) S_1 が S_2 の条件になっていることを示す。iii) S_2 が S_1 の結果又は S_2 が S_1 の付加であることを示す。例をあげると,

7. I shall stand behind this crate, and the rest of you are to conceal yourselves behind some others.
8. Holmes stopped in front of the building, his eyes shining brightly, and he walked slowly up the street and then down again to the corner, still looking intently at the houses.
9. You and Mr. Merryweather will ride in the first hansom cab and Watson and I will follow in the second.
10. I know that Spaulding should do just as he promised and I agreed to the hours with Ross.

時間的に順序づけられている二つの事象が (7) では同時であり (すなわち *while* で表わされる関係), (8) では前後している (S_1 then S_2 の関係)。(9) では *If S_1 then S_2* の関係を表わし, 一方 (10) の *and* は S_1 so S_2 と置きかえられる。

(7)–(10)と違って, 次の例では, そういう二文間の知的意味上の説明は出来ない。

11. Inspector Jones has three officers waiting at the front door.
And we must be silent and wait.
12. H: The only thing I could come up with was that he was digging a tunnel to some other building.
W: And how did you make sure, Holmes?

(11) では「そっちの方は安心していいんだ, 我々のやるべきことは」というように, 話者が先行の発話行為 (「断定」) に対して, 注釈を加えている。一方, (12) では聞き手 W (atson) が話者 H (olmes) の話を続けさせるべく, 次の発話をうながす意味で *and* を用いている。また, (13)

のように単独で用いることは会話ではしばしばある。

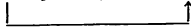
13. H: When I realized that the City and Suburban Bank backed up against Jabez Wilson's shop, I knew I had the answer.

W: And?

形式化して示せば、たとえば (8) は (14) に、(11) は (15) に示されるような関係がある。

14. I tell you [$\langle S_1 \rangle$, and $\langle S_2 \rangle$]

15. I tell you [S_1]. And I tell you [S_2]



(14) では [S_1 のあとで S_2] というのがひとかたまりとなるから、意味論的であるが、一方 (15) では *and* が S_1 と S_2 を連結するのでなく、*I tell you* という部分を連結するのであるから、この意味で語用論的なのである。

2. BUT

But は意味論的意味としては、「対立・対比・対照」を示す。すなわち、*but* でつながれた前の文 S_1 は、後の文 S_2 と異なっていること、反対であることを示すために用いられる。たとえば、

16. I was ill but I went out to the meeting.

17. His brother went to college but he didn't.

(16) では、「病気であること」は「会議に出ないこと」への正当な理由になるのであるから *but* が用いられ、(17) では「大学に行った」に対して、「大学へ行かなかった」という反対の事実を強調するために *but* が用いられている⁹⁾。

こういった意味的特質とは異なる、純粋に語用論的に用いられる *but* がある。次のペア文はこの二つの対立をよくあらわしている。

18. a. Perhaps John has children but perhaps John's children are away.

- b. Perhaps John has no children, but perhaps John's children are away.
(Levinson, 211)

二段構造を用いて形式化すると、

- 18'. a. I tell you [$\langle S_1 \rangle$ but $\langle S_2 \rangle$]
 b. I tell you [S_1]₁, but I tell you [S_2]
 └──────────┬──────────┘
 ↑

(a)の方は「子供がいるが家を出ているので(いない)」ということで、 S_1 と S_2 がひとかたまりになるのに対し、(b)の方は「子供はいないと言いましたが、(そうは言いましたが)多分皆家を出ているのです」ということで、 S_1 であると言ったことを、訂正するために *but* を用いている。このような語用論的用法は、会話によく見られる。

19. A: When are you able to begin your duties with the League?
 B: But I already have a business.
20. A: Let's have dinner.
 B: But it's time to watch TV.
21. A: Can you tell me the time?
 B: But you have a watch!
22. A: It's no use, John Clay. You cannot escape.
 B: So I see, but at least my pal got away.
 A: But you're wrong!

(19)―(22)はいづれも短い対話であるが、いづれの場合も *but* は前の発話をうけた第二話者が、文頭で用いている。先行する発話が、質問であったり(19)、誘いかけであったり(20)、要請であったり(21)、陳述であったり(22)するのであるが、その受け手である第二発話は、それを行なうのに十分な条件を満たしていないことを表明するために、冒頭における *but* の使用となるのである。すなわち、語用論的 *but* の意味は、(19)では「あなたはそうおたづねになりますが、(私は)仕事がありまし

て)おたづねにお答えすることができません」ということである。同時に、「Let's have dinner. とあなたが勧誘しても、私の方は準備が出来ていません」(20)ということであり、「時間を教えるとの要請ですが、それはおかしいですよ」(21)ということであり、「仲間は逃げのびたとおっしゃるが(あなたのおっしゃることは正しくないですよ)」(22)ということである。一言で言えば、先行の発話は場面的に不適切であるということが、冒頭の *but* の意味である。

もう一つ次の例を見てみよう。

24. H: After all, you are richer by over 30 pounds from it, to say nothing of the knowledge you have gained on every subject under the letter 'A'.

Wilson: But I do want to find out about them, Mr. Holmes ... who they are and why they played this prank on me.

この場合 *but* は(やはり冒頭にあるが)、相手のことばをさえぎり、その先行発話を受け入れられないということを表わしている。先行発話の事実に対して異議申立てをしているのではなく(これは意味論的 *but*)、先行発話を受け入れる条件を問題にしているということである。

次に、語用論的 *but* が、同一話者の発話行為を連結している例を考えてみよう。

24. There is something a little funny about it. But what did you do next?
 25. Forgive me for what I am about to do, but I must make absolutely certain.

(24) の場合、先行する文によって断言という発話行為が行われている。一方、後続する文によって行われる行為は相手に情報を求めるものであるから、 S_1 を受け入れるためには、両者不整合のまま並列するわけにはいかないという気持が働いて、*but* による連結を行うのである。(25) でも S_1 によって行われる要請という行為と S_2 によって行われる断言という

行為の間に、語用論のレベルで不整合があるため、*but* によって結ばれていると考える。同一話者による語用論的 *but* の使用の場合、先行発話を受け入れる条件を担うということは、このように、二つの発話行為の不整合を連結して、一つの発話にまとめ上げるために、いわば地ならしをしているということになる。

3. OR

語用論的 *or* は、意味論的 *or* とかなりはっきりとその用法が異なる。意味論的 *or* の意味は、 S_1 と S_2 に表明された二つの事象 (A と B) のうちの一つを選ぶということである。すなわち「AかBかのどちらか一方を選ぶのであって、AとBとの両方を選ぶのではない」という意味で用いられるのがふつうである⁶⁾。

語用論的 *or* は次の諸例に見られるように、通常疑問文があとに続く。

26. What about having tea? Or, don't you have enough time?
27. I like this. Or, can't I take it?
28. Lend me some money, will you? Or, are you short of cash yourself?
29. I'd like you to go to a concert with me this evening. Or, can't you spare for a few hours?

上記 (26)–(29) において、*or* に後続している疑問文は、先行する発話行為が成立するために、十分な条件となっているかどうかを、話者がチェックし、確かめ、正すといった意味を有する。話者は、勧誘したり、命令したり、要請したりしながら、同時にその発話がその場面で適切であるか否かを確かめているのである。あるいは、先行発話の説明として必要な情報を *or* が要求している ((29)) こともある。また (28) では、聞き手に対し、要求に答えられない場合の言いわけを提供しているのである。

4. BECAUSE/SINCE

次に、いわゆる複文を作る接続詞の語用論的用法について、*because* を中心に考えてみよう。同じ *because* 節をもつ (30) と (31) を比べてみると、

30. John's at Sue's house, because his car is outside.

31. He bought a dog because he was lonely.

(Schourup & 和井田, 96)

30' I tell you [S₁], because [S₂]

31' I tell you [$\langle S_1 \rangle$ because $\langle S_2 \rangle$]

(30) の because 節は John が Sue の家にいる理由を説明しているのではない。(30') に示されるように、話者が主節 S₁ を発言する理由を述べているのである。これに対して、(31) の because 節は主節の理由を説明しているのであって、(31') で [S₂ だから S₁] というのがひとかたまりとなっている。これは意味論的分析である。

語用論的従属接続詞の例をもう少し見てみよう。

32. What's the time, because I've got to go out at eight?

33. Semantics is a bore, since you ask.

34. Semantics is a bore, in case you didn't know.

35. John didn't cheat again, if indeed he ever did.

(Levinson, 195)

32' I request you that you tell [S₁], because [S₂]

33' I tell you [S₁], since [S₂]

34' I tell you [S₁], in case [S₂]

35' I tell you [S₁], if [S₂]

(32)―(35) の各文は、そこに実際に表現されていない、主節の S₁ を含む上位節 'I tell you' ('I request you') に、副詞節がかかるのである。一言でいえば、これらの接続詞は、先行する主節によって行われている発話行為が適切であるための枠組を設定していると考えられる。接続詞に導かれる節をつけることによって、先行する発話行為がふさわしいものであることを話者が納得したいということである。(32)―(35) では、接続詞の違いはあるが、すべて語用論的接続詞として機能している。

(32) の場合、時間をたづねたのであるが、その質問という発話行為に

対して、「何故時間を知りたいのか」と言われそうな気がしたので、「出さなければならぬものだから」と大急ぎでつけ加えたのである。(33)は、先行発話の断定に対して、「あなたがたづねるから教えてあげますが」という意図でつけ加え、一方(34)では、先行発話を聞き手に受け入れてもらうためには、十分な理由が前提となるが、聞き手から「何故?」とたづねられそうだったと思ったので、「御存知かと思いますが」と受け入れられるための条件をつけ加えたのである。(35)についても、「彼がやったとしても[S_i]と言います」というつながりで、論理的 *if* 節の用法とは異なっている。副詞節で導かれる S₂ が主節の S₁ でなく、S₁ を含む上位節にかかるのであるから、(32')—(35') に示されるように、発話部分が問題であり、従って語用論の対象となるのである。

これら語用論的接続詞は、意味論的用法と違って、必ず前にポーズ(カンマ)が来ることが観察される。加えて、副詞節が前置されると非文となる。また、分裂文にすることも出来ない。

- 30'' a. *Because his car is outside, John is at Sue's house.
 b. *It is because his car is outside that John is at Sue's house.

語用論的接続詞はあくまで、先行文によって行われる発話行為に対して、一種の注釈を加えるものであり、S₁ の意味内容と S₂ の意味内容の間に論理的關係を保つ機能を有しているものではないことが明らかであろう。(30)は二つの発話行為の連続であり、一方(31)は、複数の命題をもつ一つの発話行為とみなされるのである。

III

文と文を連結するために用いられる接続詞を、語用論的角度から論じてきた。語用論的接続詞は、二文間の意味論的關係を連結しているのではなく、語用論的不整合を連結している用法であることを見てきた。すなわち、S₁ による発話行為と S₂ による発話行為の間にズレがあり、このズレを整合させる機能を担っているということである。具体的には、S₁ によって行われている発話行為が、その状況、場面に適切なものでないと感じられるとき、話者は、語用論的接続詞によって導かれる S₂ を付けるこ

とによって、この先行発話を適切なものへと整合するのである。

文中に一定の知的意味内容が与えられているとして、これを発するときどんな談話の流れの中で最もふさわしいものとなるのか、どのように仕立て上げたら特定の場面や状況に整合するのか、という側面に沿った考察である。文の意味を考えると、意味論と語用論の相互作用しあう重なりにおいて説明をつけるということが求められるわけであるが²⁾、意味論的規則によって決ってくる解釈と、語用論的に決ってくる解釈とが異なるとき、優先権をもつのは語用論的解釈である。接続詞の場合、語用論的機能は、論理的関係を述べる意味論的機能の一段上のレベルのもの、或いは、前者は外側にあつて、後者を包んでいるものと考えられるのである。発話としての文の意味は、内側の知的意味に基づき、介在する人間の意図によって、最終決定が為されるということである。

注

- 1) Halliday & Hasan (1976) は、談話におけるつなぎ語を総称して *cohesion* と呼び、これを5種類に分類している：(i)指示 (*reference*)、(ii)代用表現 (*substitution*) [*one*]、(iii)省略 (*ellipsis*)、(iv)接続詞 (*conjunction*)、(v)語造的つなぎ (*lexical cohesion*)。
- 2) 正確には、命題内容は命題に話者の判断を示す部分が加わったものと見るべきである。命題は真偽決定の出来るもので、たとえば、*John may be ill.* では、*John is ill.* という命題を中核にして、その事象が「起るかもしれない」というように、話者の判断がつけ加えられている。
- 3) 再び正確に言えば、*John is ill.* は *I tell you [it is <John is ill>]* という三層構造を為していると考えべきである (毛利 (1980), 64-72参照)。
- 4) 節と節を結びつける場合のみを取りあげる。
- 5) これらの場合も、*but* の使用が話者の判断や評価を反映している点で、純粋に意味論的とは言えないであろう。つまり、「病気」と「会議」との因果関係が、一般的知識として聞き手の方にも持ち持たれていると、話者が判断している、あるいは期待しているということがある。反対の事実を強調するということも話者の意図である。
- 6) 会話では、AかBかのどちらかという意味と共に、AとBとの両方を含むこともしばしばある。

I enjoy being with Emi. She's always telling humorous stories or introducing me to interesting people. (Schourup & 和井田, 220-221)

この場合 *or* は *and* の意味に近くなる。

- 7) より大きな枠組で統合しようとする試みは Leech (1983) などに見られる。

引用文献

- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. London: Cambridge University Press.
- 毛利可信. 1980. 『英語の語用論』大修館
- Schourup, Lawrence and 和井田由紀子. 1987. *English Connectives* (『談話の中でみたつなぎ語』). くろしお出版
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An essay in the philosophy of language*. London: Cambridge University Press.
- Van Dijk, Teun A. "Pragmatic Connectives", *Journal of Pragmatics* 3(1979). 447-456. 『海外英語学論叢』(安井稔編集) 1981-1982 (英潮社) 34-46に収録。